

人間の生の中で最も貴きもの

——王夫之の教え——

本学大学院教授 小川 晴久

「衣食足りて而る後に廉恥興る、財物草（ゆたか）にして而る後礼楽作（おこ）る」とは真理に近い指摘と私は考えてきたが、十七世紀の哲学者王夫之（一六一九—一六九二）はこれを「管商の証辞」として厳しく批判する。政治にあって「食」よりも民の「信」を重視した孔子を根拠にして蓄財に励む「勤」労行為を同じく厳しく批判するのも、現代から見ると極めて異色である。この厳しい批判の根底には人間の生の中で尊いもの、大切なものは衣食や金ではないのだ、自然や人間の美を集めた「神」なのだという王夫之の指摘（詩広伝、商頌三）は頂門の一針である。王夫之の教えに深く耳を傾けたい。